

令和五年気良歌舞伎

与話情浮名横櫛 源氏店の場 〽切られ与三〽

お富 お風呂の帰り、雨に降られて困りましたよ。

藤八 左様でございましたか。それはさぞお困りになった事でございましょう。

お富 およしや、藤八つつあんにお茶を入れておあげ。

よし あいにくお湯が冷めておりますから、少々お待ちくださいませ。

藤八 いや決して、おかまいくださいませな。今日は多左衛門殿には仲間の参会で戻りは遅くなられます。その留守に長居するの
も何とやら、雨も小降りになりましたら、すぐにお暇をいたします。

お富 ま、何ですnee藤八つつあん。折角おいでなすつたにお茶もあげずにお帰ししては、うちでかえつて後であたしが叱られ
ますから、ゆつくりとしておいでなさいませ。

藤八 それでは何でございますか。私がこのまま帰りましては、後であなたが多左衛門殿に叱られる。

お富 そうなんですよお。

藤八 あなた様を叱らせては申し訳がございませぬ。それではお言葉に甘えまして少しの間、お邪魔をさせていただきます。

お富 どうぞ、そうなすってくださいまし。

藤八 恐れ入ります。お言葉に甘えまして少しの間お邪魔をさせていただきます。でも、あなた様を叱らせまいと私がこう長居を
しては、かえって多左衛門殿に私が叱られはしますまいかな。

よし いえいえ、うちの旦那様はそのようなお方ではございませぬ。それはそれは、粹すいなお方でございますから。

藤八 さあ、その粹な多左衛門殿なればこそ、こうして美しいあなた様を世話しておかつしやるというもの……。この間も私が
な、いつまでも内緒の者にしておこうより、いつそ表向きに披露してはどうであろうと申しましたところがな、「いやいや、
あれはちと仔細あつて田舎よりつれて戻ったが、女房にするというわけにはいかぬによつて、どこぞ相応な所があれば縁づ
けてやりたい」と申ししておりましたが、ありやあ本当でございませうかなあ。

お富 そうなんですよう。あたしもこうして三年このかたお世話になつてゐるものの、ほんの床の間の置物同様でございすから、
こんな者でも世話をしやろうというお人がありましたら、ねえ、藤八つつあん、どうぞお願い申しますよお。

藤八 ああ、そりやもう、あなた様がどこぞへ縁付こうというお心持ちがございすなら、ずいぶんここらあたりにも望みの山が
いくらかも……。あちちち……。

よし お茶をひとつおあがりくださいまし。

藤八 ありがとうございます。

よし どうぞどうぞ。

藤八 恐れ入ります。頂戴いたします。

お富 どうぞ召し上がってくださいまし。

藤八 結構なお茶でございますな。このような結構なお茶を頂いては、今宵は茶にかかれて、寝られないかもしれませんなあ。

お富 まあ、藤八つつあんがお茶にかされなすつたら、どこぞの美しいお女中が、さぞ喜ぶことでしょうねえ。

藤八 いやですねえ……。この頃はね、そのような事はとんどござりませぬて、えへへ……。。

お富 あ、およし。今の中に傘を返しておいで。

よし そうでございます。では、ちよつと行ってまいります。藤八つつあん、ごゆつくりとなさいまし。

藤八 およしさん、ちよつとお待ちくださいませ。

よし なんぞご用でござりまするか。

藤八 このように世話になるのと知ってたら、なんぞ手土産を持ってまいったものを。気のつかぬことをいたしました。これは誠に軽少けいしょうではございりますが、どうか花紙けしでもお買いなすってください。

よし あれ、そのような事をなさいましては、後で私が困りますから、どうぞどうぞ。

藤八 いやこれはほんのわずかでございますから、どうかお納めください。

よし いえ、後でご新造さんへ叱られますから、これはどうぞ。

藤八 取っておいて、くださいませよ。

よし 左様でございますか。ご新造さん、藤八つつあんが私にこんな心配をしてくだすったんでございますよ。

お富 まあ、藤八つつあん、いけませんねえ。

藤八 どういたしましたして。

よし では、遠慮なく。

藤八 それからな、お世話ついでに恐れ入りますが、これでなんぞ見計らいで……。もし、これもお頼み申します。

よし よろしゅうございます。それでは確かにお預かり申します。藤八つつあん、だいぶお羽織が濡れておりますから、奥で乾かしておきましょう。さあお脱ぎなさいまし。

藤八 何かとお手かさをかけて相すみません。

よし じきに乾くことでございましょう。

藤八 よろしくお願いいたします。

よし ではご新造さん、ちよつと行つて参ります。

お富 あ、早く帰つてきておくれよ。

よし 藤八つつあん、ごゆつくり……。急いで行つて参ります。

藤八 いや、お急ぎにならずにごゆつくりと用をお足しになってくださいまし。

よし 行ってまいります……。

藤八 よろしくお願い申します。恐れ入ります。どうも……。

これはとんだお邪魔をいたして相すみません。

お富 いえねえ、藤八つつあん一人放っておいて、ごめんなさいませねえ。

藤八 どういたしましたで、どうぞわたくしにはおかまいなく、おくつろぎをなすってくださいまし。しかしまあ、さすが多左衛門殿お住まいほどあつて、結構なご普請でございますな。ほほうこの桧の具合ともうし……、あ、天井は杉の一枚板でございますな。ああ、けつこうけつこう。さすが粋な多左衛門殿は、またご普請も粋なご普請を……。おつ。このお火鉢はなかなか良く吹き込んでありますな。けつこうけつこう……。床の間を拝見させていただきます。床の間を拝見させていただきます。……。ははあ軸はほういつでございますな。いや、何から何からけつこうづくめでこのうような……。けつこうと申せばお庭がよろしゅうございますな。石灯籠いしでんろうに苔の具合が。あ、この松の枝ぶりが……。なんともいえま……。おや、何か良い匂いがいたしますな。これは何の匂いでございましょうな。

お富 藤八つつあん、そんなに側へ寄ると白粉おしろいがつきますよお。

藤八 白粉おしろい。どうぞわたくしに白粉おしろいをつけてくださいまし。

お富 男おしろいが白粉おしろいをつけるなんて、おかしいじゃありませんか。

藤八 いえ、わたくしはな、小さい時から白粉おしろいが好きで、今だに寝白粉ねおしろいをつけて寝るぐらいでございますよ。

お富 まあ、おかしな藤八つづあん。ま、そんなに白粉おしろいが好きならね、あ、ちよつとここで藤八つづあんに白粉おしろいをつけてあげましょうか。

藤八 つけてくださいますか。ありがとうございます。どうか、たつぷりとおつけくださいまし。

お富 まあ藤八つづあんが白粉おしろいが好きだなんて私はちつとも知りませんでしたよ。それじゃあねちよつとつけますよ、ようござんすか。

藤八 この白粉おしろいは良い匂いでございますな。白粉おしろいのつきの具合はどうでございますかな。

お富 藤八つづあんはね、お肌がきれいですからね、よくつきますよ。

藤八 左様でございますか。ありがとうございます。ありがとうございます。

お富 折角白粉おしろいをつけたのだから、ちよつとね、紅もつけてあげましょうか。

藤八 え、紅は大好きでございます。どうぞお願いいたします。お願いいたします。

お富 ……よくできましたよ。

藤八 左様でございますか。ありがとうございます。ありがとうございます。

お富 どうぞ、ご覧なさいまし。

藤八 どんなにきれいになったか……。どれどれ、きれいにつきましたな、お庭の松に雪が積まりました。ありがとうございます。ありがとうございます。ありがとうございます。しかしまあ、こんなにきれいになったのを誰かに見せてやりたい。そうだ、この間、角の稽古屋で唄っていた、誰に見しよとて紅かねつきよぞ、みんな主への心中だて、おおうれし、おおうれし。あ、これはとんだ粗相をいたしました。

お富 お危のうございますよ。

藤八 どうも相すみません。

(花道から与三郎、蝙蝠安)

安 おう与三、さつき手前に話したのはその家だ。なにしろ一緒に来てみな。ずいぶん話のわかる家だ。さあいこうぜ。

まずな、俺が先へ入って段取るから、手前はちよつとの間、ここで待つてくん。だがお前断つておくが、今日はほんの小遣い取りだ。いいな、わかつたな。じゃあな、待つてくんよ。

へい、ごめんくださいまし。

お富 はい、どなた？構わずにお入りなさい。

安 ああご新造。それにおいででございましたか。こないだあがりましてどうも有り難うございました。

お富 誰かと思ったらお前はん。このあいだ来たお人だね。またおいでなすつたのかい。

安 また参りましてございます。

まつぴらごめんえ。

お富 そうして今日は、何しにおいでなすつたんです。

安 また、少々ご新造へ、わらじ銭を頂戴してえと、お願えにあがつたんでございます。

お富 なんですねえ。このあいだも私があんなにしてあげたじゃあないか。それに第一、そんななりをして、たびたび家へ来られちゃ、近所隣へ外聞が悪いから、今日はまあ、お断りだねえ。

安 そりやまあ仰るとおり、二度と来られた義理じゃねえんでございますが、やあ何ね、今夜はわっちのこつちやあねえんでございますよ。実は友達の野郎が、仲間げんかをやらかしまして、こう面から体へかけて、めっぼうけりな傷を負ったんでこ

ございます。そこでまあ友達中が寄りあつて、湯治にでもやつてやろうと思つたんでございますが、なにしろわちどもの身分じゃあ、もうどうすることも出来ませんから、そこでまた、ご新造に少々わらじ銭を頂戴してえとお願えにあがつたんでございます。

今、野郎を呼びますから、しばらくお待ちになつておくんない。

おい、あにい、こつちへ入んなこつちへ。いいから、はやく入んな。

へい、ご新造。この野郎でございませぬ。まあ面に傷がございませぬ、かぶりものはごめんなすつてくださいませ。おうおう、あにい。今、俺からご新造によくお願え申してあるから、おめえからもな、お頼みするがいいや、な。ええ、もし、ご新造どうか恵んでやつておくんない。

お富 何の事かと思つたら、また、そのことでござんすか。折角じゃああるけれど、今夜はあいにく旦那も留守なり。私にもそうそうはしにくいから、今日はまあお断り申しますよ。

安 何ですな。ご新造。そうおつしやつちや、二の矢がつけねえじゃあございませぬか。そりやあねえ、旦那がおいでにならなくても、わちどもがこうしてお願えにやつてきても、随分いい筋があるから、へ、こうして参るんでございませぬよ。

お富 あ、あ、お待ちよ。今、聞いてりやなんですつて。こうやつて無心に来てても、いい筋があるから来るとお言いだが、そりや、そりや、お前はん、おかしなことを言うじゃあないか。何も私の家で隠し売女や勝負事の宿をしたというじゃなし、何もお前はんがたに付け込まれて、うしろを言われる覚えはありやしないよ。

安 これ、ご新造。とんでもねえ事をおつしやいますが、そりやあねえ、こちらのお家で隠し売女や勝負事の敷でもなさりや、わ

つちどもが見逃しても、第一おかみでうつちやつちやあおきやせんやあ。へつ。左様でございましょう。

だがねえ、ご新造なんざあ、いいご身分さあ。年柄年中お蚕ぐるみで、重いものといったら、箸と茶碗のほかもったことはなし。たまに旦那がおいでになさりやあ、おとり膳の差し向けえで、うめえ物を腹さんざん召し上がったその挙句、やわらかな布団の上で、その真つ白な細い手を枕の下へ、ぐうーつと入れて、ねえ、もし旦那え……。えへへへへ。おつな気休めの文句のひとつも言やあ、もう何でも夢の出るといふ結構なご身分さ。いやなんともご新造、そうじゃあございせんか。なにね、別に大したこつちやあねえんでござんすよ。ほんのわらじ銭でよろしゅうございますから、どうかね、この野郎に恵んでやつておくんないさ。

あ、いけねえ。こいつはあいにく煙草を切らして。ご新造、申し訳ございせんが、煙草を一服、振る舞ってやつておくんないさ。ご覧のとおりみんな粉になつちまいやがつて。申し訳ございせんが、いや、ほんの一服だけ。

お富 おあがんなさい。

安 こりやどうもありがとうございます。じゃあ、ほんの一服だけ頂戴させていただきます。ほんの一服だけ。どうも、ありがとうございます。

藤八 あ、もし、そこなお人。さつきから聞いていれば、相手は女のかただと思つて、何を言うのだ、ええ。それにわらじ銭がほしいなら、なぜ男の私に言いなさらん、ここにはれつきとした男がいるじゃないか、男が、え。(安と顔を見合わせる)
男の私に言わないで、え、まあ待ちなさい。まあ待ちなさい。そのわらじ銭を私が扱ってあげようじゃないか。

お富 ま、藤八つあん。そんな事をいただいちや、私が困りますよ。

藤八 ええ、すぐに帰しますから、私にまかせておいて下さい。話しをつけます。よろしゅうございます。よろしゅうございます。ええ、さあさあ、そのね、わらじ銭を私あげますから、これをもって早くおかえり。おかえり。

安 それじゃああの、なんでございますか。旦那がわらじ銭をおくんなさる。こりや旦那、なんとも申し訳がございません。へ、もう旦那にまでそう気を使わせて。いやね、ただいま、これを頂戴いたしましたして、じきに、じきにお暇させていただき……もし、旦那。わらじ銭というのはたった百か。

藤八 いや、多かろうが持つてお帰えんなさい。

安 ありがとうございますがね。こりやまあそつちへお返し申しやしょう。

藤八 ははは、この人はまあ見かけによらない遠慮深い男だねえ。そんなに、そんなに遠慮しないでね、さ、これを持つてお帰んなさい。

安 いや、そりやまあ思し召しはありがとうございますがね、こいつはまあ、頂戴いたしたも同然だ。だからねえこれはそつちへお返し申しましよう。

藤八 妙な事を言う男だねえ。お前がわらじ銭が欲しいというから、私が扱つてあげるんじゃないか。え、何のかんというの。は、え、それじゃあ何かい。私のこの扱いが気に入らないとでも言いなさるのかい。

安 さようさ、まあ気に入らねえから返したんでえ。

藤八 ええ？

安 気に入らねえから返したんでえ。大概に目鼻をあいて物を言いな。大の男が二人、鼻緒を揃えてやって来たんだ。手足をまきにこなしてもな、おう、一貫や二貫の仕事になるわなあ。それに何でい百ばかり出しやがって、扱いもねえもんだ。おう、第一、手前の出る幕じゃあねえからな。手前なんかはそつちの隅へ引っ込んで、鼻ん中へ指でも突っ込んで掻き回してやがれ。人をこけに見やがって。おう、こうもり安さんたあ俺がこつた。(捨て台詞)

お富 こう見えたって私には、立派な亭主のある体。とやかく言われる覚えはありやしないんだよ。(捨て台詞)

安 こりやご新造、いやなんとも申し訳がございません。

お富 今ね、私が話がしてわかるようにしてあげるから、ね。(捨て台詞)

安 こりや、どうも毎度おそれ入ります。いや、何ね。ご新造のようにそういう風に言っていただけりや、何もわつちも大きな声をだしやあいたしません。あの野郎がね、横あいからでまして、偉そうな口……。おい、なんだそのつら、すつこんでろい。

お富 静かにしておくれ。

安 何度も申し訳がございません。

お富 私がね、これをあげるから、さ、これを持って、早く帰っておくんなさいよ。

安 こりやどうも、毎度おそれいます。いや、ただ今これを頂戴いたします。ご新造、こりやこのように過分に頂戴いたしましてどうもありがとうございます。ええもう、ただいま、ただいま、じきにお暇させていただきます。

おい、あにい。ご新造は話が早えや。な、おめえのわらじ錢に、おい見や、一両分おくんなすった。ありがてえじゃねえか。お礼を申して早くお暇しようぜ。おう、こいつは俺が預かっておくからな。

与三 安、手前それでよけりやあ先へ帰んねえ。

安 お、おい、おめえ何を言うんだ。な、だから、だから初めから断つたはずじゃねえか。な、今日はほんの小遣い取りだ。お前な、よく考えてみるがいいぜ。このご時節にわらじ錢に一両分くださりやあ、もう御の字じゃねえか。さ、お礼を申して早くお暇しようぜ。

与三 だからよう、それでよけりやあ先へ帰れと言うことよ。

安 手前もわからねえ野郎だなあ。おい、お前は初めてだろう、手前は初めてだろうが、俺はたびたびこちらに伺ってな。いわ

ばね、こちららのお得意様も同然だ。そんなことはどうでもいい。お礼を言つて帰ろう。さ、早くお礼を言わねいか、さ、早くお礼を……。

それじゃあ何か、手前一分じゃあ不足だと言うのか。

与三 そりやあな、一分もらつて有難うございますと、礼を言つて帰るところもありやあまた、百両百貫もらつても、さ、帰られねえ場所もあらあ。この家の洗いざらい、釜の下の灰までも俺がものだ。掛け合は俺がするから、お前は一服やつて、待つていてくんねえ。

安 ご大層な事をまきだしやがったな。それじゃあ何か、お前何かかけた山でもあるのか。

与三 何でもいから、その一分は返しちめいねえ。

安 何、この一分を返しちめえつて？そりやあ返すのはいいが、俺を玉なしにしちやあ困るぜ、おい。

与三 大丈夫だということよ。

安 そうか、お前がそういう風に言うなら、お返ししねいものでもないが……。お、おい、本当に大丈夫だろうな。

与三 俺に任せておけということよ。

安　　そうか、まあそれほどまでに言うなら、こいつはまあ一応お返しけえもうすが……。何だかさっぱりわけがわからねえ。

(安うしろへ下がる。与三郎身なりを整える)

与三　ええ、ご新造さんえ、おかみさんえ、お富さん。いやさお富、久しぶりだなあ。

お富　そういうお前は。

与三　与三郎だ。お主は俺を見忘れたか。

(与三郎、お富顔を見合わせて見得)

与三　しがねえ恋の情けが仇、命の綱の切れたのを、どう取り留めてか木更津から、めぐる月日も三歳越みとせこし、江戸の親にやあ勘当うけ、よんどころなく倉ぐらの、谷七郷やつしち郷は食い詰めても、面に受けた看板かんばんの、傷がもつけの幸さいうえいいに、切られ与三と異名を取り、押借おしがり強請ゆすりも習おうより、慣れた時代じでえの源氏店げんじだな、そのしらばけか黒堀くろほりに、格子造の囲いもの、死んだと思つたお富とは、お釈迦様でも気がつくめえ。よくまあお主あ達者でいたなあ。おい、安。これじゃあ一分じゃあ帰けえられめえ。

安　　なるほど、そりゃあ一分じゃあ帰けえられめえや。

与三　まだ木更津にいた時は、そつちも亭主のある体、それと知りつつうっかりと、はまり込んだはこつちの誤り、そのかわりに

はな、源左衛門が殺しもやらす切りさいなみ、そのおもかげには、こう見や、総身をかけて三十四箇所の刀傷。こりやあ誰のために受けた傷だ、いやさ、どなたのために受けた傷だ。手前もその時海松杭に、追い詰められて木更津の、海へざんぶと飛び込んだと、聞いた時の俺が心。今に忘れずにな、念仏の一遍も唱えていたんだ。それが今聞きやあ立派な亭主がある。お富、それじゃあ手前済むめえがな。

お富 そう言わしやんすはもつとも、もつともでござんすが、私の言う事も聞いたうえ、どうなとしたがようござんす。

与三 なんだ、言うことがある。言うことがあるなら早く言つちめいな。

お富 私もあの時ながらえる、心無けれど港から、海の深みへ捨つる身も、ただよう浪の夢うつつ、こぎ行く船に助けられ、医者よ薬と手厚い介抱。そのおかげには甦り、今はこうしているものの、困われ者とは表向き、色めいた事は少しもなく・・・

与三 何を言つてやがんでい。

お富 この家の留守を預かつて、楽すぎるほど生中に、お前はあの時死なしやんしたか、またはこの世にござんすかと、忘れた暇はありやしません。それを今のような恨みごと、そりやお前あんまりじゃ、あんまりでござんすわいなあ。

与三 こうこうこう、手前気休めも大概にしな。半死半生でいるものを、医者よ薬と手当をして、こうやって困っておくものを、誰が手を出さずにおく奴があるものか。のう、安よ。

安 そうだ、そうだ。こんな美しい代物しろものを、ただ囲っておくような、そんな奇特なべらぼうが、今時どこにあるものか。おい、与三。これから先は一体いっしょどうするつもりだ。

与三 この女の居所を、こう突き止めた上からは、お富を俺の女房にするか、または手切れと下種げすばるか。ま、どっちにしる俺の面、立てずにはおかねえんだ。

安 やあそれがいい、それがいい。おめえもこの女のためにやあ、面に三筋の刀傷。俺も名うてのこうもり安。三筋にこうもりはつきものだ。後にや俺がついてるぜ。おう、与三、しつかりやれ、しつかりやれ、しつかりやれ。

与三 お富、手前てまえを世話をしているのは、どこのどいつだ。その相手の名前を言ってみな。その相手の名前を言ってみな……。

(藤人と与三郎目を合わせる)

与三 おい安、あそこに妙な面した野郎がいるが、あいつに聞きや分かるだろう。

安 そうだ、あの野郎に聞きやあわかるかもしれないねえ。ちよつと待ちなよ。さあ、こつちに出てきな。さあ手前てまえなら知ってるだろ。この女は誰が囲ってたか、その野郎の名前を言ってみな。

藤八 お富さんを囲っている。そ、そ、それは……。

安 言わねえか。言わねえならこうして……。

藤八 言う、言う、言う。言うから緩めて……。

安 言うか、本当に言うな。よし、じゃあ、緩めてやるから早く言いな。その野郎はなんて言うんだ。ええい、早く言わねえかい。

藤八 ええい、そんなことは知らぬわい。

安 野郎、逃げやがった。

与三 安、逃げたものはしょうがねえ。うつちやつておきな。大丈夫だよ、大丈夫でえじょうぶがつてことよ。

お富。これからは手前てまえが相手だ。その相手の名前を言いな。誰に囲われてるんだ。その相手の名前を言ってみな。お富、言ってみな……。きりきりと言わねえかい。

(木戸の前に多左衛門)

多左 ああ、いや、お富が口から聞こうより、私がそこへ行つて話しましょう。

安 何だわしが？へっ、どこの誰だか知らねえがな、この女にあちつとばかり関わりあいがあるんだ。さあ言いてえことがある

なら早く言いな。俺が聞いてやるから、さあ早くぬかしやがれ……。うつ……。

お富 お早いお帰りでございました。

多左 今日は仲間の参会が思いのほか早くすみしました。そうして、ここにおいでこのお方は、お主の身寄りの衆か。

お富 さあ身寄りでもあり、近づきでもあり。久しく打ち絶えていたものも、こうしたなりで訪ねてこられ、あなたの手前、面目のうござんますわいな。

多左 なあに、面目ないことがあるものか。人の浮き沈みは知れぬもの。そうしてあなたは、なんのご用でおいでなすったか、ま、それから先に聞きましょう。

与三 そんなら、あなたがこちらの旦那でございますか。旦那、お初にお目にかかります。わっちはこのお富の身寄りのものでございます。この女の身についちや、さぞ込み入った深え訳わけもございましょうが、どういふところからお世話なさいましたか。それが聞きとうございます。

多左 お富の身寄りとあるからは、どうせその句が出ると思いました。かいつまんで話しましょう。こういう訳だ、聞いてください。ちようど足かけ三年後、漁灯の仕入れに安房上総、銚子へ乗り越す漁船に、便船頼んで帰る途中、波に漂うひとりの女。海賊にでも出会ったか、ただしは身投げか助けよと、引き上げ見れば身内の傷。介抱するうち蘇り、どういふ訳かと様子を聞けど、過去をつつむ女の素性。もとより身寄りのないと聞き、これまで世話をするうちに、昨日今日と思いが、数えて

みれば三年越し。月日の経つのは早いものさねえ。

与三 さようでございますか。それで様子が、すつぱりと知れました。半死半生でいたものを、医者よ薬と手当をして、こうやって、もとの体にしておくんすった。お礼はお礼で申しませう。旦那、いろいろご親切にありがとうございます。が・・・、それから先が気に食わねえんだ。え、お富もお富だ、よくも旦那に襟ついて、俺を突き出しものにしやがったな。

お富 ま、何で私がお前を突き出しものに。

与三 そうじゃねえか。え、俺一人を突き出しものにしやがった。そうだよ、ええ、そうに違えねえんだ。

多左 まあうつちやつておおきなさい。向こうで何と言おうとも、こつちに忌憚のないことは、お主の心に聞いても知れよう。そうしてあなたは、このお富のためには、何にあたるお方でございますねえ。

与三 わつちかい。わつちは言わずと知れた、木更津にいる時から、このお富とは・・・。

お富 あ、あ・・・お前は私の兄さん。

与三 何・・・お前めえな、そんなこと言ったってな。

お富 あ、兄さん・・・兄さんでござんすわいなあ。

与三 ……わっちはお富の……兄でございます。

多左 そんならこなたは、お富の兄御。

与三 兄も兄、義理の深^ふえおあにいさん。

多左 これお富、お主もいい兄を持って幸せものだなあ。この話は私がつけましようから、ちよつとお待ちなすって下さいまし。

与三 待つことは待ちますが、旦那、お早くお願い申しますよ。

多左 お手間は取らせません、ちよつとお持ちください。

もし、そこなし、ちよつとここへ出てきなさい。

安 へい。

多左 はてまあここへ、来いと言うに。

安 へい。

多左 お前は安じゃないか。こなたどうしたものだ。お前の親は甚兵衛といって、ながらくお店にご厄介になっていたが、よくせきこなたに愛想がつかたと見える。十八の時に勘当したが、もう、うんじょうして、その心も直ったと思いのほか、顔にこもりなぞを彫りつけて、忌み嫌われるを幸いに、諸処方々と押借り強請。もうその根性を直さないと、畳の上の臨終はおぼつかなかるぜ。第一、門口の表札に、山形に井桁はお店の印。その下に多の字と書いてあれば、言わずと知れたわしが家。それを見忘れちゃあ済まなかるうぜ。

安 えーえーもう、穴へでも入りとうございます。

与三 旦那、お早くお願い申しますよ。

多左 これは、お待たせいたしました。お見受けをするところ、まんざら、卑しいお生まれとも見えません。ただ、お富を連れていきただければ渡さないでもありませんが、今夜という訳にも参りますまい。ここにちようど持ち合わせた金が十四、五両ありますから、これをあなたに差し上げましょう。これを元手に小商いの店の一つもだし、堅気になんなさるがいい。これ安。これをこなたに、おあげなさい。ささ……。

安 へーい。これは旦那、どうにもありがとうございます。ただいま、ただいまじきに、お暇します。おい、あにいな。旦那がこれをお前にとくだすったんだ。さあさあこれを頂戴して、さ、お暇しようじゃないか。

与三 それじゃ何か。旦那がこれをおくんなすったのか。

安 旦那が、お前にと下すつたんだ。ありがたくお礼を申して、さあさあお暇しよう。

与三 折角の旦那のおぼしめしだが、これはひとまず旦那にお返し申してくれ。

安 おめえ何を言うんだ。今、旦那が何とおっしゃった。な、お富さんを連れてっていいが、ま、今夜という訳にやあいかねえ。そこでこれをくだすつたんだ。だから今夜はこれを頂戴して……。さ、お礼を申してお暇しよう。

与三 まあそうでもあろうがな、何でもいいから、こりやあ旦那に返してくれ。

安 手前もわからねえ野郎だなあ。おう、これがおめえ判証文を入れて手切れ足切れという金じゃああるめいし。いわばおめえこりや、ただ取るような金……。いや、ただのお前の体じゃねえから、この金を元手にして小商いでもしろと旦那が仰るんだ。旦那がおっしゃることは分かりきっているじゃあねえか。さあこれを頂戴してお暇しよう。早くお礼を申して帰ろう。な、帰ろう……。それじゃあ何か、俺がこれほど口をすっぱくして言っても、どうしても帰らねえと言うのか。

与三 当たり前よ。

安 それじゃあどうしても帰らねえというんだな。

与三 うるせい男だなあ。

安 おう、与三。なま言うねえ、なま言うねえ、なま言うねえ。

おう、手前大層豪気なものになりやがったなあ。ご大層立派な男になりやがったなあ。おめえ、忘れやしねえ、裸一貫で俺んところ転がり込んで来やがって。塩噌の世話に始まって、盆の上のいかさまから、人を嫌がらして銭を取るのは誰が教えたと思うんだ。はばかりながら、この俺がみんな教えてやったんじゃねえか……。

え、旦那、申し訳ございません。ただいま、ただいま直にお暇いたします……。

お前にそう文句を言われたんじあ俺は旦那に対して申し訳がねえんだ。

これからは俺が相手だ。さあ俺と一緒に、来やがれ。

与三 おい安、手前そんなに言わねえでもいいじゃねえか。

安 俺の言うことを聞いて帰ってくれるか。

与三 今夜はこれで帰るとしよう。

安 へい、もし旦那、この野郎もね、わっちの威勢に恐れまして、じきに帰ると申します。どうも今夜はありがとうございます。

与三 もし旦那。今夜はこれで帰りますが、お富の体はこのままじゃおきませんぜ。

安 いらねえ事あ言わないで早くお暇しようぜ……。もし、旦那。そのうち四角な帯でも締めまして、お詫びにあげります。どうも今夜はいろいろありがとうございます……。ご新造、どうか旦那へよろしくおっしゃってくださいまし。

与三 こつちやあこのまま帰るものの、帰ったあとは差し向けえ。

安 えーい、妬きあがる。

与三 よしてくれ。そんなんじやあねえ。

安 おやかましゅうございました。

安 おい、与三、与三、与三。おりやあ今夜ほどひでえ目にあつたことはねえぜ。

与三 お前、あの人知ってるのかい。

安 知ってるどころの騒ぎじゃねえんだ。あれは俺の親父が世話になつたお店の番頭さんだ。もうびつしよりと汗かいたまつた。

与三 そうかい、そりやさぞ弱つたらうな。

安 ああ、こんな困つたことはありやしねえ。ああひでえ目にあつたもんだ。

与三 おい安。ところでな、今夜は俺はちよつと寄り道して帰るから、すまねえがお前へ帰って、こう一杯やって待っててくん

な。

安 おう、じゃあな俺は先に帰^{けえ}って酒の支度でもして待つてるよ。

与三 そうしててくんねえ。

安 ……おおい、ちよつと待つてくんな。お前^{めえ}何か忘れ物^{もん}がありやしねえか。

与三 いや、忘れ物^{もん}は別に何にもありやしねえよ。

安 お前^{めえ}冗談^{じゆたん}言^いつちやいけねえよ。お前^{めえ}はこれからちよつと寄り道^{よりのち}するんだろ。俺は先^{まへ}へ帰^{けえ}って、しやもでも買^かって待つてるんだ。という^{めえ}ことはお前^{めえ}と俺とはここでこう別^{わか}れ別^{わか}れになるんじやあねえか。

与三 そうよ。

安 そんなら何かお前^{めえ}、忘れ物^{もん}があるだろうが。

与三 何^{めえ}だ？お前^{めえ}と俺^俺がここでこう、別^{わか}れ別^{わか}れになるから何か忘れ物^{もん}が？別^{わか}れ別^{わか}れに……。何^{めえ}言^いってんだ、何^{めえ}にもありやしねえよ。

安 おうおうおう与三。手前てまえちよつともうろくしたんじゃねえか。忘れ物ものがないなんて冗談言っちゃいけねえ。ああ、そうだ。いいか、両の手をな、こう胸へあててな、それからこう腹の方へぐうーと下げて、よく考えてみてくんねえかな。

与三 お前まえも色んなこと言う野郎だな。なんだって、胸から腹に手を入れて考えろ？何言ってやがんでい。いくらこう胸の方からこうやってぐうつと下げたって何にもありや……。ふっ……。思い出した。

安 ありがてい。思い出してくれたか。

与三 今日の立前たちまえだろ。

安 それを忘れちゃああんまりじゃねえか。

与三 何だよう。そんならそうと早く言やあいいじゃねえか。

安 だがな、お前まえと俺の中うちでも、こいつはちよつと言いにくいからなあ。

与三 そんなに遠慮するには及ばねえよ。

与三 おい安、見や見や。いい色じゃねえかい、ええ。

安 いい色だなあ……。

与三 き、立前だ。手、出しな。

安 よしてきた。

与三 何だ手前、強飯でも貰うんでもありやしねえのに両の手を出す奴があるものけえ。

安 だってお前、こう、大は小を兼ねるっていうからな。

与三 欲の深え野郎だな。

安 はははは。

与三 よし、いくぜ。一枚、二枚、三枚、四枚、五枚。

安 ……おいおい与三。お前こいつはちよつと、勘定が違うんじやねえか。

与三 いや、違わねえよ。そんだけありや御の字だろ。

安 だって、こりやあ五両しかねえじゃねえか。こりやちよつとお前勘定がおかしいじゃねえか。

与三 お前さつき何て言った、一分でも御の字だと言ったじゃねえか。

安 さつきは確かにそう言ったがよお……。さつきはさつき、今は今だがな、お前。こりや、ちよつと少ねえや。

与三 そうでもあるがな。今夜はちよつと俺も銭が要ることがある。な、それでお前我慢してくんな。

安 俺もちよつとこう色々いりわけと入訳があるんだ。これじゃあんまりじゃねえか。

与三 それじゃあこうしよう。また何かの時には俺がな……。今夜は我慢してくんな。

安 頼む、このとおり。頼むから、頼む……。

与三 手前てまえそんなに言うんならビタ一文やらねえ。これ返かえしてくんねえ。返かえしてくれ。さ、返かえしな。

安 い、いや、いいよ、いいよ。お前めえと俺の仲だ、今夜はこれでまけといてやろうわな。

与三 そうしてくんな。

安 今夜の儲けは……。五両、一分に、百の立前か。

与三 そんなら安。

安 与三。

与三 別れるぜ。

安 いい商売しょうばいだなあ。

安 おうそれじゃあお前まへ、早く帰かえってきてくんな。

与三 おう、じきに帰かえるから一杯いっぱいやって待まちっててくんな。

安 それにしてもいい色だ。あーありがてえや……。

(安が花道から出て行くのを見て、与三郎、木戸から中の様子をうかがったあと裏へ)

お富 そうじゃ。

多左 これお富、血相をかえてどこへ行くのか。

お富 私しあ、お前に面目なさに。

多左 なあに、面目ない事があるものか。ま、ここへ来て座りなさい。今に様子も知れようから時節を待つとするがよい。

(権助、花道から出る。七三で大あくび)

権助 ごめんくださいまし。

多左 お、誰だ。

権助 番頭さん、おいででございましょうか。

多左 何か用が出来たのか。

権助 今、お店^{たな}へ女の奥様と男のお侍さまが来まして、番頭さんに会いたいと申しますからお迎えに来ました。

多左 ああ、そうか、わかりました。何かご用ができたのであろう。それじゃあ私はお店^{たな}にまた戻りますが、ことによると今夜は遅くなるかもしれないから、そなたは先に寝ているがいい。

お富 それではまた、お店たなへおいででございますか。

権助 今時分、旦那をお迎えに来るのは、おかみさんには気の毒なことだなあ。

お富 あ、これ、そんな事を言うものではない。

多左 お、これを後で見えておくがいい。

お富 や、そんならお前は私の兄さん。

多左 火の用心を、気をつけるがいい。

お富 こりや兄さんであつたかいな。兄さん……。わたしや知らなんだ、知らなんだ、知らなんだわいなあ。

藤八 最前の騒ぎで台所へ逃げ込んで、今まで忍んでおりました。多左衛門殿は、今宵はお店たなへお泊りゆえ、悪い奴がうせぬよう今夜はわしが留守番して、お前と差しでひとつ飲み、楽しむつもりじゃ。これ、お富さん、ひとつあがらんかいなあ。

お富 わたしあそれどころではないわいなあ。

藤八 これはしたりお富さん。そのようなことを言わずと……。これはしたり……。もし、お富さん。

お富 離してくださいやんせ。離してくださいやんせ……。

(与三郎出る。お富から藤八を引き離してひと蹴り)

藤八 ううつ。

与三 お富。

お富 え、お前は与三さん。よう戻ってくださいやんした。多左衛門さんは私の兄さん。

与三 え。

お富 これを見てくださいやんせ。

与三 ん、そんならお前の兄貴であったか。

お富 知らずに過みごせし三年とせ越し。

与三 切るに切られぬ二人の縁^{えにし}。

お富 再びめぐり会^あうからは。

与三 おいお富。生涯^{しょうげ}手前^{てまえ}を（チョン）離しあしねえよ。

お富 与三さん、うれしゅうござんす、うれしゅうござんす……。

与三 お富、会いたかつたぜ……。会いたかつたぜ……。

（幕）